

# 仏教慈濟基金会の社会的有用性

## Social Utility of the Buddhist Tzu Chi Foundation

関西大学 社会安全学部

金 澤 佳 志

Faculty of Societal Safety Sciences,  
Kansai University

Keishi KANAZAWA

関西大学 社会安全学部

土 田 昭 司

Faculty of Societal Safety Sciences,  
Kansai University

Shoji TSUCHIDA

### SUMMARY

The Buddhist Tzu Chi Foundation is an NGO based in Taiwan, founded by Shih Cheng-yen. The foundation conducts volunteer and service activities around the world. For example, the foundation distributed relief funds in response to the Great East Japan Earthquake and Noto Peninsula earthquake in Japan. This paper discussed the foundation's organizational structure and history, and examined its unique disaster relief process focusing on the 921 Earthquake and the 88 Floods in Taiwan as examples. We also discussed the relationship between the foundation's unique Buddhist network and social capital, and the expansion of the organization and its social usefulness.

### Key words

Volunteer organizations in Taiwan, Buddhist Tzu Chi Foundation, Buddhism, service activities, disasters

## 1. 仏教慈濟基金会の概要

### 1.1 仏教慈濟基金会

仏教慈濟基金会とは台湾東部の花蓮に本部を置く NGO 組織であり、正式名称は「財団法人 中華民国 仏教 慈善事業 基金会 (Buddhist Compassion Relief Tzu Chi Foundation)」<sup>[1]</sup>である。創設者は釋證嚴 (1937-) であり、「花蓮の導師」や「台湾のマザー・テレサ」と称される<sup>[2]</sup>。釋證嚴は、1966 年に仏教慈濟基金会を創

設し、頂点として財団を指導している。

志賀<sup>[1]</sup>によれば、仏教慈濟基金会の会員数は、2016 年時点で 500 万人以上であり、1,000 万人を超えるとの指摘もあると述べている。また、世界の 50 以上の国に支部があり、502 の地域で支部を設置している<sup>[3]</sup>。日本においても、東京都新宿区、大阪府東大阪市、群馬県に支部を設置している<sup>[3]</sup>。

慈濟財団のホームページによれば、財団の主な活動として、「四大志業八大脚印」と呼ばれる

8つの社会貢献事業を上げている。すなわち、①慈善志業、②医療志業、③教育志業、④文化志業の四志業が活動の中核であり、これに加え、⑤国際援助、⑥骨髄バンク、⑦環境保護、⑧地域ボランティアの社会貢献事業である<sup>[4]</sup>。

### (1) 釋證嚴と仏教慈濟基金会創設の歴史

仏教慈濟基金会の創設者である釋證嚴は、財団の活動方針や理念・思想に大きな影響を与えている。1937年に台湾台中県清水で生まれ、本名は王錦雲である。

何<sup>[5]</sup>は釋證嚴の生い立ちについて述べている。幼少期は養父母に育てられ、仏教に帰依するまではキリスト教に興味を示していた。クリスチャンの友人から「聖書」やキリスト関連の小冊を読んだが、物足りない印象があった。その後、仏教の経典を読み、すぐに納得し、仏教の内容は論理的であり、科学的でもあり、哲学的であると気づいた。

23歳の頃、養父が脳溢血により急死したことをきっかけに出家生活を開始した。出家に関しては、諸説があり、他の伝記によると、近所の尼さんの影響を受けたともある<sup>[5]</sup>。

出家生活中の29歳の頃、妊娠した先住民の女性が流産の恐れがあるとして山間部から花蓮の病院に運ばれてくるという出来事があった。その際、多額の医療費を払うのが困難なため、経済的理由から病院を追い出されることとなり、出血多量で死亡するという事件が発生した。このような体験を経て、釋證嚴は経済的な面で十分に医療を受けることができない人々がいるという現状を知ることとなった<sup>[6]</sup>。また、出家生活の経験から仏教に対しての独自の解釈や思想を持つようになった。思想や理念に関しては後述する。

上記のような点を経て、釋證嚴は1966年に36人の有志女性たちとともに「仏教克難慈濟功

徳会」を創設した<sup>[1]</sup>。(会は1980年に仏教慈濟基金会に改称した)<sup>[7]</sup>

### (2) 仏教慈濟基金会の発展と社会的背景

仏教慈濟基金会は1966年創設後、様々な活動を展開し、台湾のみならず世界的に活動の幅を広げている。ここからは、仏教慈濟基金会の発展を促した要因や背景を述べる。

仏教慈濟基金会の発展には、大きく3つの要因が考えられる。①社会環境(政治経済)、②文化伝統(儒教の倫理観、仏教の慈善観念、民間の「功績累積」の観念など)、及び、③指導者の斬新な思想、の3点である<sup>[8]</sup>。

仏教慈濟基金会設立前、台湾は、アメリカの援助を受け農業を振興していた。当時の台湾人は、過去の宗教や文化的伝統に強く影響を受けていた。前者では、仏教の布施の慈善の強調であり、後者は、儒教の倫理観と勸善の考え方や、台湾の文化的国民性である「功德」の理念である。「功德」は慈善に取り組むことで良い来世を約束されるというものである。当時の台湾では、新しい伝統を作る風潮も盛んであった。例えば、キリスト教と仏教の影響を受けた「人間仏教」も影響を与えている。これにより、世俗を救済する風潮が拡大した<sup>[8]</sup>。

仏教慈濟基金会は、会員数の増大に伴い、1979年から1990年にかけて医療と教育事業の事業展開を行った。医療に関しては、花蓮慈濟病院を開業し、教育事業では慈濟看護士専門学校を開講した。

1990年からは、慈濟の活動として、慈善・文化・医療・教育以外に、骨髄バンク、環境保護と地域ボランティア事業にも展開した。また、同時期に国内だけでなく、国際災害援助も乗り出し、マス・メディアを有効活用することで事業規模の拡大をした<sup>[9]</sup>。

## 2. 仏教慈濟基金會の現在までの活動

### (1) 「四大志業八大脚印」の展開

仏教慈濟基金會の活動は、慈善・文化・医療・教育や骨髄バンク、環境保護と地域ボランティア事業と多岐にわたって活動の幅を拡大している<sup>[1]</sup>。

### (2) 「四大志業」

#### ① 慈善志業

慈善志業は、四大志業の中でも最も古く、歴史のある志業である。1966年の創設のタイミングから開始され、30戸の低収入家庭の生活援助が発端となる。具体的には、貧困家庭の訪問ケア、医療援助、薬代の補助、住宅ケアの他、独居者の葬儀や納骨補助、刑務所の訪問等を行っている。経済的状况に応じて、金銭的ケアを行っており、長期・短期の給付が行われている。政府の生活保護費と同額が支給されている場合もある<sup>[1]</sup>。

#### ② 医療志業

医療志業は、病が貧困の根源という考えから、誰もが医療の恩恵を受けられるように医療の普遍化を目標としている<sup>[10]</sup>。1972年に、花蓮市に「慈濟仏教義診会」を設けたことから始まったとされている。当時の活動は、外科、内科、小児科等の医師と看護師がボランティアとして週2回、無料診察していた。1986年に最初の総合病院に当たる「慈濟花蓮総合病院」が完成する。900床のベッドを備えており、1日に患者を約1,400人受け入れ可能であり、急患の患者は150以上対応可能であった。現在では、「心蓮病房」と呼ばれる緩和ケア病棟や老人デイケアセンターである「軽安居」等も付設されている。病棟内では、ミニコンサートやお茶会などを催しており、精神的なサポートを行っている<sup>[10]</sup>。

病院の診察方針として、「病気を診察するので

はなく、病気になった人を診察・世話をし、その心をケアする」というもので、病気の治療のみならず、精神的な部分も含めて患者の幅広い治療を行っている<sup>[1]</sup>。

#### ③ 教育志業

教育志業は、1989年开始され、慈濟看護専門学校の開設を端緒としている。当時は、先住民の教育不足から、都市部での売春労働が問題となっていた。そのため、先住民の子女を優先的に入学させ、学費の援助や支援を行っていた。就職にあたっては、慈濟病院に優先的に採用している。1994年に開設された慈濟医学院は当初単科大学であったが、社会福祉学や生命科学、教育学等の学科を増設し、総合大学となった<sup>[1]</sup>。医学や科学技術を学ぶ学生たちには、技術だけでなく人の心も分かる細やかな心も兼ね備えなければならない、という證嚴上人の考え方に従い、生け花や茶道、書道などもカリキュラムとして教育を行っている<sup>[11]</sup>。

#### ④ 文化志業

文化志業は、「慈濟月刊」の発行などを主として行い、1967年から行われている。2005年に、台北の開渡地区に人文志業センターが完成したことから、文化志業（人文志業）と呼称されるようになる。

人文志業センターでは、慈濟文化出版部や慈濟大愛テレビなどの部門が設置されている。事業の中心的なものとして、定期刊行物の発行、各種書籍の出版、テレビ・ラジオの番組制作と放送などを行っている。

特に、大愛テレビ局による放送事業が団体拡大に大きな影響を与えている。毎朝、静思精舎で行われる釋證法師の法話は、夕方に大愛テレビ局にて放送される。内容は、世界で発生している災害や紛争を取り扱い、慈濟の精神を拡大している。加えて、「大愛人間劇場」というオリジナルドラマも人気が集まっている<sup>[1]</sup>。2007年

にはインドネシアの首都ジャカルタとメダン両市で、インドネシア語による番組「啓発の窓」と「慈濟ニュース」が放送を開始し、海外にも文化志業を展開している<sup>[12]</sup>。

### (3) 「八大脚印」

仏教慈濟基金会は「四大志業」のほかに、国際援助、骨髄バンク、環境保護、地域ボランティアからなる「八大脚印」を展開している。

#### ① 国際援助

国際援助は、1991年のバングラディッシュ洪水被害の援助を契機としている<sup>[13]</sup>。同年には中華人民共和国の華中・華東地域で起きた大洪水の際にも援助や募金活動を行った。援助活動は、台湾との国交有無に関係なく、宗教や民族にもとらわれることなく、援助を求める国に支援を行っている。活動としては、緊急支援物資の提供、医療サービスの提供、福祉・医療施設の建設協力、生活手段の確保などが行われている。支援に関する資金の調達源は募金が多く割合を占めている<sup>[1]</sup>。

また、後述するように、自然災害に対する援助プロセスとして五つの原則（即時、直接、重点、尊重、需要に応える）を実施している<sup>[7]</sup>。

国際医療グループ「慈濟国際人医会（TIMA）」も結成され、世界各地の自然災害・戦災の現場や、医療設備のない地において活動を行うことも可能としている<sup>[1]</sup>。

#### ② 骨髄バンク

1993年10月に開始され、急速にドナー登録が拡大している。2011年までに約31万人のドナーデータが収集されている。骨髄移植の件数は2,372例（2016年時）となっている。また、臓器提供や死後の献体などにも力を入れている<sup>[1]</sup>。

#### ③ 環境保護

環境保護活動は、1990年に開始された。人間

のエゴによる無駄遣いが原因で地球の資源の不足や環境問題が深刻化していることを懸念し、資源ごみのリサイクルやペットボトルの回収、古紙回収、また街中の公園、山林や海岸部の清掃活動に努めている。また、ビニール袋や使い捨ての容器の使用、紙やプラスチック製品の無駄をなくす呼びかけも行っている<sup>[1]</sup>。

「慈濟国際人道援助会」（TIHAA: Tzu Chi Humanitarian Aid Association）は、環境保全ボランティアが回収したペットボトルを再生資源として、機能性の高い毛布や衣類の開発及び生産を始めた<sup>[1]</sup>。それらは、救援物資として配布するほか販売もしている。

#### ④ 地域ボランティア

地域ボランティアは1996年の台風9号（賀伯台風）を発端に、地域ボランティアの活動姿勢や組織編制が地域に密着したものに再編された<sup>[1]</sup>。

活動の内容としては、要救助者への家庭訪問や福祉施設並びに刑務所への訪問を行っている。また、事故・災害の救援活動、文化教室の開催、健康相談、街の公共施設の清掃などを行っている。

このような地域に密着したボランティア活動を行うことにより、住民が助け合い、迅速な救援活動を行うことができる<sup>[1]</sup>。加えて、地域住民の親密化によって犯罪防止にも役立っている<sup>[14]</sup>。

### (4) 自然災害時における救援・復旧プログラム

#### ① 921地震における活動

921地震とは、1999年に発生した台湾中部の南投県集集鎮付近を震源地とするマグニチュード7.7の地震である<sup>[15]</sup>。

仏教慈濟基金会の自然災害時における救援・復旧方式の特徴として、「即時、直接、重点、尊重、需要に応える」の五原則が挙げられる<sup>[8]</sup>。

「即時」については、921地震発生後の被災地の行政役員の言葉から、「地震発生後の僅かな時間の内に、慈濟救助隊が台中市内に買い込んだ肉饅頭、粽、卵などの食べ物、わが集集鎮役所にとどけに来ました」とある。実際、仏教慈濟基金會は、地震発生直後から、各被災地において率先して救援活動を行っている<sup>[8]</sup>。

「直接」に関しては、救援活動に関して一切の仲介を通さず、直接に慈濟のボランティアが現地調査を行うという体制がとられている。具体的な活動として、被災者リストの作成、救援金、救援物資の交付などを実施している<sup>[8]</sup>。

甚大な災害の際には、「重点」地域を設定し、救助が必要な地域へと赴いている。加えて、10年以上の国際援助活動から、各被災地域の文化や風習に配慮し、「尊重」の意識を組織として徹底している。

「需要に応える」という点に関しては、921地震後、被災地域中心の天候不良から、被災者の住居確保が困難になった際、18万人の慈濟ボランティアが仮設住宅の建設に励み、17カ所の仮設住宅を完成させた。住民の需要を的確に把握し、的確な活動を展開している<sup>[8]</sup>。

高らの921地震の研究<sup>[8]</sup>によれば、仏教慈濟基金會は、1991年に発生したバングラディッシュ水害の際に義援金を送ったことを契機に、国際災害援助の活動を展開し始めた。その後、国際災害救援を開始して以来、仏教慈濟基金會は時を追うごとに独自の救援方式を行っている<sup>[8]</sup>。

上記の五原則に加えて、仏教慈濟基金會の救援方式では二つの援助モデルである「緊急救援」「長期的な支援」、さらに「コミュニティ・ボランティア」の重視が着目される<sup>[8]</sup>。「緊急救援」と「長期的支援」モデルとは、前者においては、被災者の基本的な需要に応え、後者においてがハード・ソフト両面の支援を強調することである。2004年時においても、「安心」（被災者の恐

怖、失望、悲しみを慰める）、「安身」（仮設住宅の組み立て、学校の再建など）、および、「安生」（「希望がある」というメッセージを作成し、被災者の生命に対する意義の再現性を旨とする）の3つの柱とする一連の救援・復興プログラムを継続している<sup>[8]</sup>。

## ② 八八水害における活動

2009年の八八水害（モーラク台風）は、中南部および東部の南投県・嘉義県・台南市・高雄市・屏東県・台東県の広範囲で大規模な洪水や土砂災害が発生し、台湾各地に甚大な被害を及ぼした。原住民族を含むおよそ90の村落が深刻な被害を受け、高雄市甲仙区の小林村では犠牲者が9割に達する被害となった<sup>[16]</sup>。この災害に対して仏教慈濟基金會は、災害発生直後から迅速に支援活動を展開した。台風上陸前に全国17カ所に災害対策センターを設置し、被災地に救援隊を派遣するとともに、炊き出しや物資の配布、募金活動を行った。募金額は発災からおおよそ1年で46億元に達し、物心両面で大規模な支援を実施した<sup>[16]</sup>。

仏教慈濟基金會の支援活動は、①急難救助、②再建・安定、③コミュニティ構築の三段階に分けて計画された。その中でも特に中心的な取り組みが恒久住宅の建設及び費用の提供であった<sup>[16]</sup>。恒久住宅の建設には、政府と仏教慈濟基金會や赤十字会などのボランティア団体が資金援助と建設を行っている<sup>[17]</sup>。最終的に2,315戸の復興住宅のうち約半数の1,029戸を仏教慈濟基金會が担当した<sup>[16]</sup>。しかし、この復興住宅建設は、特に先住民族の被災者との間で大きな摩擦を生むこととなった。先住民族にとって土地は単なる生活の基盤にとどまらず、文化的・宗教的な意味を持つものであり、復興住宅への移住は生活様式や文化の喪失を意味していた。被災者からは、仏教慈濟基金會の復興支援は「慈善的覇権」とも評され、政府の強制移住政策を

支える存在として批判された<sup>[16]</sup>。また、慈済会の復興住宅のデザインや運営方針が、被災者の文化や生活習慣への配慮に欠けるといった指摘も多く寄せられた<sup>[16]</sup>。

このように、八八水害における仏教慈済基金会の取り組みは、規模や実行力の面では大きな成果を上げた一方で、被災者との間に十分な合意形成がなされず、結果として支援の正当性が問われるものとなった。これは、災害後の社会秩序や復興支援の在り方が、単に支援者側の論理だけでなく、被災者との関係性の中で築かれる必要があることを示す事例である<sup>[16]</sup>。

### 3. 仏教慈済基金会の活動の特徴

#### (1) 菩薩ネットワークの形成

金子<sup>[9]</sup>は、仏教慈済基金会は、菩薩道の本質を重んじて活動していると論じている。金子によれば、菩薩道とは、現場主義であり日常の何気ない行動で、自分の身近にいる人々と深くかかわっていくものである。必ずしも信仰心が先行し、助けたい心が目覚めるわけではない。まず、行動してみることによって、内に秘めた仏性の心が目覚め、発揮される。

ボランティアは日常生活レベルでの支援的な営みになり、心やたましいの救いに関わる営みにもなる。ここが単なる社会貢献活動と一線を画する部分である。日常的支援が宗教的救いに質的転換する<sup>[16]</sup>。それに、助けられると感じるのは、実は助けている本人自身でもある。

どんな人間であっても、その中に必ず仏性を秘めているがゆえに、本人の努力や精神次第で顕現させることも可能である。人間世界において、仏性を顕現させることができるのがボランティア活動である。そのため、ボランティアは人間菩薩であり、これこそが、「仏教の人間化」を意味するものである。人間菩薩の思想は、自らを磨くことで仏性を顕現させることに加え、

同時にこの世界に浄土を建設する思想でもある。仏教慈済基金会は、こうした思想を基盤とし、人間仏教の実践的展開によって、唯一無二の財団をめざして進歩を続けていると金子は述べている<sup>[9]</sup>。

そして、仏教慈済基金会在が構成する思想と活動によって、「円」と呼ばれる組織網を構成する。ボランティア活動には上下の関係も、先輩・後輩の関係も存在しない。ほぼ私領域での対人コミュニケーションであるため、独自の社会的ネットワークを形成し、お互いが対等に励まし合いながら、菩薩志業の達成のために努めている<sup>[8]</sup>。

そうした「円」の関係は、人間世界における因果関係の「縁」につながる。悪縁を断ち切り、新たな善の縁に繋ぎ変える。そうした取り組みこそが「菩薩ネットワーク」であり、仏教慈済基金会在を特徴づける思想である。以上が金子が説明する仏教慈済基金会在の活動思想である<sup>[9]</sup>。

#### (2) ソーシャル・キャピタルの展開

「菩薩ネットワーク」を通して、救済する側と救済された側の両者が仏性に目覚めるサイクルになっているのであれば、このようなサイクルは菩薩の再生産活動と呼べる。外面的なサイクルだけでなく、内面的なサイクルの展開でもあり、利他的実践においては、実践する者の仏性が磨かれ、仏性が磨かれることによってさらに善行に励むサイクルが確立される。これは、「善の循環」ととらえることができる。

このようなサイクルを、社会学的な概念に当てはめると、「ソーシャル・キャピタル」の一形態に該当する<sup>[18]</sup>。ソーシャル・キャピタルとは、社会関係資本と訳され、物的資本と人的資本に連なる第3の資本概念であり、社会関係と社会構造に埋め込まれた資源である。目的実現を目指す者の可能性を増やしたいときに用いられる

ものとされる<sup>[19]</sup>。

ソーシャル・キャピタルは、同質のものを結び付ける「社会的求心力」を持つものと、異質のものどうしを結び付ける「社会的遠心力」の二種類があり、宗教教団においても、NPO や NGO 団体にとっても、発展と組織拡大のため目指すべき目標形態である。

その点、仏教慈濟基金會は、四大志業八大脚印などの多様なボランティア活動と、「菩薩ネットワーク」において、ソーシャル・キャピタルとしての再生産の循環構造を有している。地域に密着した活動を通して、その地域とのネットワークや関係性が確立され、「菩薩ネットワーク」から新たな人材や活動ニーズが見つかることにつながる。そして、新たに財団に加入した人々がボランティア活動を行い、さらに私領域的な社会ネットワークや組織関係を拡大・構築することを可能としている<sup>[8]</sup>。

金子は、この循環を展開することによって、仏教慈濟基金會は宗教教団と NGO 財団の両面として発展を遂げているとしている<sup>[9]</sup>。

#### 4. 仏教慈濟基金會の可能性

宗教教団として社会的存在価値を示すためには、独自の思想や救済観と、教団や教会・寺院としての実利的な機能を併せ持つ必要がある。この調和がとれているのが仏教慈濟基金會である。

仏教慈濟基金會は、「宗教教団」と「ボランティア団体」を両立している社会的モデルとして存在している。活動が公となっているため、社会の関心と世間の評価が仏教慈濟基金會に寄せられる。それに伴い、教団の認知と独自の仏教ネットワークの形成が繁栄に起因している。

日本においても、仏教慈濟基金會は東日本大震災及び能登半島地震で支援をおこなった。

東日本大震災では、緊急生活支援として「住

宅被害見舞金」という名目で現金が手渡された。支給額は単独世帯で3万円、2~3人世帯では5万円、4人以上では7万円とされていた<sup>[20]</sup>。

能登半島地震においても、被災者の世帯人数に応じて1世帯あたり約13万円から17万円の見舞金が手渡された<sup>[21]</sup>。支給条件として、住宅の半壊以上の被害があり、65歳以上の高齢者がいる世帯が対象であり、合計1,813世帯に支給された<sup>[21]</sup>。

このように、仏教慈濟基金會を先駆けとし、宗教教団による寄付やボランティアの文化が台湾において浸透した。それを踏まえると、仏教慈濟基金會は民間からの福祉社会の発展において大きな功績がある。

金子は、昨今の社会福祉について、政策論や制度論、または、個々の方法論・技術論に偏る考えがある。それに対し、仏教慈濟基金會は普遍的な思想に基づく、福祉文化の確立を仏教の精神をもとに展開している。このような、民間からの社会福祉の発展において、今後の宗教教団としての可能性がある<sup>[9]</sup>と述べている。

今後の仏教慈濟基金會の活動が他のボランティア団体にどのような影響を与えるのか注目していきたい。

#### 謝辞

本稿は、2024年8月に台湾花蓮県消防局、財団法人中華民国仏教慈善事業基金會本部、国立東華大学台湾文化学系などへの聞き取り調査を行ったことに端を発している。多くの便宜をいただいたKUO HuiYing氏（台湾台北市在住）に深謝申し上げる。

#### 参考文献

- [1] 志賀浄邦 (2014). 台湾仏教・慈濟会による慈善活動とその思想的基盤 菩薩行としてのボランティア活動と「人間仏教」の系譜 京都産業大学日本文化研究所紀要 Vol. 241 No.11 pp.58-103.
- [2] 佛門網 buddhistdoor : <https://ur0.jp/qkwZw> (2025年8月8日確認)

- [3] 慈濟日本サイト：連絡先（所在地）<https://tw.tzuchi.org/jp/>（2025年8月8日確認）
- [4] 金子昭（2005）. 宗教社会福祉観点から見た台湾・仏教慈濟基金会 天理大学おやさと研究所年報 Vol.11 pp.33-43.
- [5] 何燕生（2020）. 中国語圏における「人間仏教」—その思想と実践— 「宗教研究」 Vol.94 No.2 pp.81-108.
- [6] historical treasures（2021）. *JING SI The Journey Begins* Volume1 pp.408.
- [7] Wikipedia（2025）: Wikipedia. 慈濟基金会, <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%85%88%E6%B8%88%E5%9F%BA%E9%87%91%E4%BC%9A>（2025年8月8日確認）
- [8] 高玉潔, 渥美公秀, 加藤謙介, 関嘉寛（2004）. 台湾集集大地震における慈濟功德会の活動「ボランティア学研究」（国際ボランティア学会） Vol.5 pp.147-161.
- [9] 金子昭（2015）. 人間世界の中の慈悲濟世の展開—グローバル化時代における菩薩ネットワーク— 天理大学おやさと研究所年報 pp.124.
- [10] 慈濟全球：医療事業[https://tw.tzuchi.org/jp/index.php?option=com\\_content&view=article&id=492:2011-05-01-23-12-42&catid=87:medicine-mission-&Itemid=272](https://tw.tzuchi.org/jp/index.php?option=com_content&view=article&id=492:2011-05-01-23-12-42&catid=87:medicine-mission-&Itemid=272)（2025年8月8日確認）.
- [11] 慈濟全球：教育志業[https://tw.tzuchi.org/jp/index.php?option=com\\_content&view=article&id=493:2011-05-01-23-17-08&catid=91:education-mission-&Itemid=287](https://tw.tzuchi.org/jp/index.php?option=com_content&view=article&id=493:2011-05-01-23-17-08&catid=91:education-mission-&Itemid=287)（2025年8月8日確認）.
- [12] 慈濟全球：文化志業[https://tw.tzuchi.org/jp/index.php?option=com\\_content&view=article&id=494:2011-05-01-23-22-27&catid=90:culture-mission-&Itemid=283](https://tw.tzuchi.org/jp/index.php?option=com_content&view=article&id=494:2011-05-01-23-22-27&catid=90:culture-mission-&Itemid=283)（2025年8月8日確認）.
- [13] 慈濟日本：国際援助[https://tw.tzuchi.org/jp/index.php?option=com\\_content&view=article&id=495:2011-05-01-23-26-55&catid=60:internation-relief-&Itemid=273](https://tw.tzuchi.org/jp/index.php?option=com_content&view=article&id=495:2011-05-01-23-26-55&catid=60:internation-relief-&Itemid=273)（2025年8月8日確認）.
- [14] 慈濟日本：地域ボランティア [https://tw.tzuchi.org/jp/index.php?option=com\\_content&view=article&id=498:2011-05-02-01-49-16&catid=93:community-volunteers&Itemid=289](https://tw.tzuchi.org/jp/index.php?option=com_content&view=article&id=498:2011-05-02-01-49-16&catid=93:community-volunteers&Itemid=289)（2025年8月8日確認）.
- [15] 磯部邦昭, 山本哲司, 杉村俊郎（2000）. 集集大地震の活断層と高分解能衛星画像の利用写真測量とリモートセンシング Vol.39 No.2 pp.2-3.
- [16] 村島健司（2015）. 宗教による災害復興支援とその正当性—台湾仏教による異なる二つの災害復興支援を事例に— 先端社会研究所紀要 第14号 pp.55-67.
- [17] 樋口倫生（2012）. 台湾の八八水害対策 農林水産省 第7章 pp.181-190.
- [18] 長谷部美佳（2022）. 多文化共生の源流としてのインドシナ難民支援 明治学院大学教養教育センター紀要 pp.94-104.
- [19] 藤見俊夫, 柿本竜治, 山田文彦, 松尾和巳, 山本幸（2011）. ソーシャル・キャピタルが防災意識に及ぼす影響の実証分析 自然災害科学 J. JSNDS 29-4 pp.487-499.
- [20] 金子昭（2011）. 東日本大震災における台湾・仏教慈濟基金会の救援活動 釜石市での義援金配布の取材と意見交換から 宗教と社会貢献 Vol.1 No.2 pp.73-80.
- [21] 台湾の慈善団体, 能登地震の被災世帯に見舞金現地で手渡し最大17万円：田中宏樹. フォークス台湾 <https://japan.focustaiwan.tw/society/202406300002>.（2025年8月8日確認）

（原稿受付日：2025年1月20日）